

だいきく通信 第五十号 「夏の号」

ひあつ

今年は例年になく早い梅雨明けでした。雨がとても少なかったため、水不足が心配です。

新型コロナウイルスは一旦収まってきたかと思われましたが、ここへきてぶり返しているようです。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻もおさまる兆しが見えませんが、暗い気持ちになることばかりですが、せめてご神前で手を合わせるひと時だけは心を落ち着け、まずは自分の身の回りのことからしっかりと考えていくことが大事だと考えております。

急に厳しい暑さに見舞われ、体調を崩すかたも増えていると聞きます。くれぐれもお身体に気を付けてお過ごしくださいませ。

社報「だいきく通信」は今号で第五十号となりました。これからも細々と続けたいと思います。引き続きご愛顧ください。

今回の内容は、最近の当神社の話題、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。



大国神社の今

○御朱印を再開しております

長らく休止しておりました御朱印を再開しております。当面は、あらかじめ紙に書いたものをお渡しする形をとりたいと思います。

御朱印再開に合わせて、授与品をお出しする際の紙袋にオリジナルのスタンプをあしらいました。ご朱印もこの袋にてお渡しいたします。ご参拝の折に社務所にお声がけください。



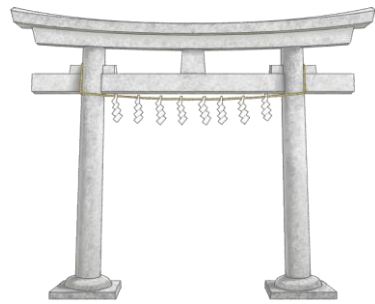
お宮あれこれ〜氏神・産土神・鎮守神〜

神社にお祀りされている神様の中でも、もつとも身近に感じられるのは「氏神（うじがみ）」様ではないでしょうか。

「鎮守（ちんじゅ）の神」という言い方もよく耳になさるでしょう。また、「産土神（うぶすながみ）」という言葉もあります。今回は、私たちになじみの深いこういった神様についてお話ししましょう。

「氏神」とは、本来は文字通り、ある氏を名乗る一族が祀った祖先神または守護神のことを言います。中世に、各地の荘園の地頭（長官）に任命された武士たちはそれぞれの土地での支配を強めていきます。その際、土地の神を氏神として祀るようになりました。そのため、氏神を祀る人たちも、従来の血縁関係のある人々から地縁関係のある人々、つまり同じ土地に住む同士へと変わっていききました。その変化の中で、土地の神様である産土神と氏神が混同されるようになりました。

その「産土神」ですが、もともとは生まれた土地の守護神という意味です。「うぶ」とは「産む・産まれる」という意味で「産湯（うぶゆ）」などの語に見られる表現です。出産・新生児を守る神様である「産神（うぶがみ）」とも関係があり、地域によっては出産後すぐに屋敷の中にある「産土様」あるいは「産神様」にお参りをする習慣があるところもあるそうです。



次に「鎮守の神」について。鎮守神とは、もともとはある決まった土地や場所を守る神という意味でした。中国の寺院に祀られた「伽藍（がらん）神」というものに起源があるとされます。日本においては古く奈良時代から、神と仏を同一のものとみなす考え方があり、神様と仏様を同じ場所にお祀りすることが広く行われました。「神仏混淆」あるいは「神仏習合」と呼ばれる考え方です。そのため、勧請（かんじょう）既存の神社から神様の御霊（みたま）を分けていただいております（と）によって、寺院の守護神として御霊（みたま）をお祀りするようになりました。代表的なものが、延暦寺の山王権現、興福寺の春日明神などです。

そののち、鎮守神は寺院だけでなく、国や城を守護する存在と捉えられるようになっていきます。代表的な例が、国を守護する伊勢神宮、国ごとの一宮（いちのみや）などです。ちなみに、太田道灌が江戸城を築いた際に城の鎮守として勧請したのが山王社、現在の日枝神社（東京・赤坂 写真）の始まりであるという説もあります。

鎮守神は本来、その土地にもともといらっしゃる神様を鎮めるために勧請されたもので、多くは霊力の強い神様のようです。そういう神様をお祀りすることによって、地域や土地に平安をもたらしていただこうと考えたわけです。

しかし、時代が下るとともに、この鎮守神もそれぞれの土地のもともとの神様と混同されるようになってきました。特に中世後



期から近世期にかけては、各集落の神社が、その由来とは関係なく「鎮守」と呼ばれるようになりました。たとえば、次のような例があります。(1) 地方の豪族が一族の中で祀ってきた勧請神が村の氏神に昇格する、(2) 新しい土地が開拓されると、その土地の産土神をお祀りする神社が新たに建てられ、それがその土地の鎮守と呼ばれる、などです。

それに加えて、江戸幕府の寺請制度(キリシタン信徒ではなく寺の檀徒であることを、檀那寺に証明させた制度)の中では寺院が神社を管理したため、多くの神社が寺院の鎮守のように見なされたことも、こういった変化に拍車をかけました。こうして、「鎮守神」は「氏神」「産土神」と同じ意味で用いられるようになり、「鎮守の神様」といえば、その土地に住む人々を守ってくださる神様という意味になったのです。

地域の神社にお参りなさるときは、ぜひそのお宮の由緒を読んでみることをお勧めいたします。長い時間の中で神様がどのようにお祀りされてきたのかを知ることには、その土地の歴史を理解することにもつながるでしょう。



参考文献 『神道事典』(弘文堂)
 「以下はジャパンナレッジ利用」『日本国語大辞典』(小学館)、『日本大百科全書』(小学館)、『世界大百科事典』(平凡社)、『例文 仏教語大辞典』(小学館)

祭礼・祈禱などのご案内

○次回甲子祭

令和四年九月八日(木) 午前五時～正午

○開運千人講祈禱祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈祷受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈禱を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは以下の電話番号もしくはメールにてお願いいたします。

不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話してください。のちほどこちらからご連絡いたします。

〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話 ○三―三九一八―七九三〇

携帯 ○八〇―一九八七―八七二六

eメール daikokujinja@gmail.com



次号発行予定

「だいいこく通信第五十号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和四年九月八日甲子祭に発行予定です。

(連載まんが)

大吉うさぎ ～神社豆知識 その12～ くま こまち 作



「だいいこく通信」第五十号 令和四年七月十日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇—〇〇〇三 東京都豊島区駒込三—二—十一

<http://www.daikokujinja.org>